



仲間がいる。だから遠くへ行ける。

6年後、想像もつかなかった自分に出会える学校

「自立」と「協働」を教育理念とし、少人数でのきめ細かな指導と本物志向の教育を行う。
多摩丘陵の最高地点という恵まれた自然に加え、天文ドーム、年間を通して使用できる温水プールなど、
施設も充実しており、6年を通じて伸び伸びとさまざまな体験ができる。
今年に入り、各種大会で次々と実績を挙げる部活動。そして始まる「アクティブラーニング」。多摩聖から
目が離せない。



強さの秘訣は、仲間です。

憧れというより天の上の存在でした——谷野理星さん(高2)は、アメリカで開催された大会の印象を率直に語った。今年3月、多摩大学附属聖ヶ丘高等学校ダンスドリル部は、国際大会の「American Dance/Drum Team National International Championship 2014」に出場。各国から集まった400チームと競い、POM部門・総合部門で見事1位を獲得した。「発表は英語で、意味はわからなかったけれど、まさかと思って」と最初は信じられなかったというが、実力は折り紙つき、全国レベルの大会でも毎回のようによい成績を収めている。しかし世界が相手となると課題も変わる。「海外の方は個人のスキルがとても高くても日本の強さもある。全体で動きを合わせたり、笑顔に関しては日本のほうが得意なんです。評判もよく、みなさん応援してくださったのでよかったです」。多摩聖のチームワークが世界に通用した瞬間だった。

その礎になるのが生徒たちの仲の良さだ。部活動は基本的に中高合同、男女共に練習に励む部も多い。総勢46名、都大会で実績を挙げる水泳部もその一つ。25メートルX5レーンの温水プールを存分に使い、皆で掛け声を出しながら精力的にメニューをこなす。「先輩は練習中は厳しいですが、普段はとても優しく仲間が良いです」と中学期長の根岸奏人君(中3)。互いに切磋琢磨し、支えながら取り組むことで、一人では得られない真の実力を身に付けていく。こうした光景は特別なものではなく、日常として至る所で見ることが出来る。「多摩聖は男女関係なく友達がたくさんできて、毎日楽しいです」(同中学期副部長宮崎達也君・中3)。「学年全体も本当に仲が良いんですよ」(谷野さん)。はつきりと口にするその言葉からは、仲間がいることの大きさと誇りが伝わってくる。



谷野理星さん ダンスドリル部での活躍の他にも、中3で取り組む卒業論文で最優秀賞を受賞している



五十嵐一郎校長 学校ウェブサイトでは自ら定期的に日記を更新している

『アクティブラーニング』始動

こうした土台があるからこそ、新たな取り組みも活きてくる。今年度より五十嵐一郎校長が就任。少人数だからこそきめ細かい指導や、本物志向の教育はそのままに、生徒たちが積極的に学ぶ機会を増やしている。その指標となるのが「アクティブラーニング」。「教員主導ではなく、生徒たち自身がテーマを決め、事前学習や現地調査、発表まで行うことで、能動的に学習に取り組む習慣を身に付けます。また中1・中2の2月には、年間の学習の成果を保護者に発表することを予定しています。人前に立つ機会を増やすことで、表現力の向上と主体性を養うことが目的です」(五十嵐校長)。他にも、地理の授業ではオリジナルのシミュレーションゲームを用い、楽しみながら生徒同士が自然に議論できる場を設けるなど、教科ごとの取り組みにも随所に工夫が凝らされている。

行事に目を向けると、来年度よりイングリッシュ・キャンプが中2で行われる。2泊3日英語漬けの日々を送ることで、中3の2週間にわたるニュージーランド修学旅行につなげ、将来を見据えた英語力を養っていく。また高2の修学旅行では、行程を3つに分け、クラスを解体しグループごとに違う経路をたどるなど、今までの経験を踏まえつつ、思考力と行動力を高めるユニークな計画が盛りだくさんとなっている。

こうした取り組みは、4月より1カ月かけて高3の全生徒と個人面談を行ってきた手応えが背景にある。「朝礼で話している時とは違う彼らの姿に出会い、多くの発見がありました。学習や部活の状況、5年間過ごした感想などいろいろ話しました。これらにつながる充実した時間でしたね」(五十嵐校長)

新たな動きは生徒からも生まれている。先述の谷野さんは来年に留学することを検討しているという。中1から毎日同じ仲間と過ごしてきて、日々楽しく充実した中で、他の生活に順応してみたい、新たな刺激を受けたいという思いが生まれてきました。教員も生徒も、現状に甘んじることなく挑戦を続けている。さまざまな改革に取り組む多摩聖が今、面白い。

